
5人の懐中時計

佳春

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

5人の懐中時計

【Nコード】

N8793W

【作者名】

佳春

【あらすじ】

それぞれの懐中時計が刻む主の物語。

時計屋はその懐中時計になにを込めて作ったのか。

ブログ（前書き）

初めての投稿です。

どうかお手柔らかにお願いします。

プロローグ

ある時計屋が作り出した、世界で五つしかない懐中時計。

その懐中時計は持つべき五人のために、そして五人を繋ぐために作られた。

懐中時計を持つのは五人の少女。

天真爛漫でみんなを笑わせるのが得意なムードメーカーの園田明日美。

その傍らで優しく微笑む容姿可憐な奈良夕莉。

場を和らげ、笑みをもたらす和顔愛語の栗田秋絵。

的確なツツコミとさりげないボケをかます臨機応変な大野浩子。

常に怠惰な雰囲気醸し出し、時に導くことがある一暴十寒な誉田亜耶香。

この五人の友情の証として作られた五つの懐中時計。

それぞれがそれぞれの時を生き、そして、それぞれの時が交わるように、途切れないように作られた。

絆と時紡ぎの懐中時計。

懐中時計は常に主と共にあり。主と同じ時を生き、同じ時を刻む。

それぞれの物語を刻む時計。

楽しい記憶。悲しい記憶。怒った記憶。喜んだ記憶。笑いあった時間。

懐中時計は主が死ぬまで刻み続ける。

主の物語を。

暖かき物語を。

プロローグ（後書き）

拙い文章ですみません。

栗田秋絵の場合

友人と共に来た時計屋で彼女と僕は出会った。
彼女はたくさんある時計の中から、僕を手に取り、大切に壊さないように持った。

彼女は僕を買うか迷っているようだった。
友人に勧められ僕を買うことにした彼女。
これから一緒に過ごす僕の主。

彼女と僕は同じ時を刻む。

彼女は生の時間を。

僕は彼女の時間を。

僕は彼女に選ばれて心底うれしかった。

それと同時に悲しかった。

兄弟たちと離れるのが辛かった。

でも、彼女と出会えたのだから我慢しよう。

僕は選ばれただけでも幸福なのだから。

僕は彼女の幸福の証になりたい。

彼女を幸福にしたい。

でも、僕には無理かもしれない。

彼女は人間としての生を生き、僕は懐中時計として壊れるまで延々時を刻む。

相容れることなど無い。

それでも、僕は彼女のそばで時を刻みたい。

それが僕に許された唯一の願い。

彼女の笑顔のそばで時を刻めれば本望だ。

彼女のためにも正しき時間を刻み続けよう。

彼女が困らないように。

彼女が喜ぶように。

でも、一つ心配なことがある。

僕の事を忘れてたりしないだろうか。

友人らのことを忘れてたりしないだろうか。今までの暖かき記憶を忘れてたりしないだろうか。

僕はこれからの時を刻む。

なら過去の時はどうするのだろうか。

ちゃんと過去の事も覚えているのだろうか。

過去があつてこそ、今の彼女がある。

それを忘れないでほしい。

悲しい記憶も、嬉しい記憶も、悔しい記憶も、怒った記憶も、笑った記憶も。

全てが彼女の今を支え、形成している。

どうか忘れないでいて。

どうか僕の知らない時間を覚えていて。

これからも大切だけど、これまでも大切だから。

【時間】を大事にして。

僕が君の時間を刻むから、君はどうか今の大切な【時間】を精いっぱい楽しんで、覚えていて。

きっと、君とつても愛しい【時間】になると思うから。

それが僕の支えになる。

僕の心の糧になる。

だから・・・

『楽しい時間を一緒に！』

僕は君のそばで刻み続けるよ。

君のこれからの物語を。

奈良夕莉の場合

友人の誕生日を祝う品を買いに来た彼女。

彼女と共に来た友人。

友人の申し出で俺を買っていった彼女。

俺の新しい主。

俺を持つべき主。

彼女は心の底から優しい。

だが、その分悩みや苦しみを溜め込んでいないだろうか。

泣いたりしていないだろうか。

俺はただそれだけが心配だった。

他の人間のことなどどうでもいい。

ただ、主が幸福でさえあれば。

俺は懐中時計だから、時を刻むことしかできない。

でも、主は友人たちと楽しい時間を刻むことができる。

その時間を大切にしてほしい。

友人たちといずれは別れる時が来る。

それでも友人たちといた時間を大切にしてほしい。

忘れることがないように。

俺を見て思い出せるように。

俺は心の底から彼女の幸せと笑顔を願ってる。

彼女はとても優しくすぎるから、謙虚すぎるから俺は心配だ。

不幸になったりしてはいないか。

彼女は幸せだろうか。

時計の俺は見守ることしかできない。

でも、彼女と同じ時間を刻むことができる。

それだけが救いだ。

彼女は俺の主だ。俺は彼女の時計だ。

その関係は俺が捨てられるまで、彼女が死にゆくときまで途切れることはない。

それを俺は誇らしく思う。

こんな可憐な主を持てた俺は幸せだ。

彼女の手にもまれていたときの安心感。

あれは誰にもわからないだろう。

でも、誰かに知ってほしいとも思う。

我がままだろうか。

俺は彼女にいつか想い人ができた時、その想い人にこの幸福感を知ってほしい。

彼女は優しく、そして頑なな人だ。

だから、自分の信念は曲げないだろう。

だが、それもまた彼女のよさだ。

俺は彼女の良さを、優しさを紡いでいく。

彼女の時計として。

彼女と共に。

優しき物語を。そして、暖かき未来を。

彼女と共に紡いでいきたい。

それが俺の唯一の願い。

彼女がそれを叶えてくれることを願う。

『君と一緒に紡ごう』

それが俺の、誰にも聞こえない声だった。

物語を紡いでいこう。君の傍らで・・・

大野浩子の場合

友人の誕生日。

その日、急に私の主になった彼女。

急に手渡され驚く君。

内心わけがわからないだろうなと思う私。

ふふつと笑いながらも主の顔を見る。

この方が私の主。

これから時を共に刻む相手。

主ができたことに喜ぶ秒針の音。

今。私の歯車は歓喜の声をあげている。

やっと、やっと出会えた主。

これから主の生きる時間を共にする私。

私は主の役に立つことができるのだろうか。

今まで歯車と秒針の音に耳を傾けていた私には、主の役に立つことがよくわからない。

でも、主は私を喜んでくれると思う。

あくまで憶測ですが。

主は博識高い方だ。

きつと重宝してくださるだろう。

もし、重宝してくださらなくても私は気にしない。

だって、主のそばにいたことができるれば他はどうでもいいのだから。でも、どうか私を使ってほしい。

私は時計だから使ってもらわなければ、役に立つどころか邪魔になるだけ。

主を困らせるのは不本意だから。

どうか、使ってください。

私は時を刻むことで主の役に立ちましょう。

それが私の役割です。

主の役に立つ。

それこそが私が主の元に届けられた理由。

これからの時を刻み、記憶を覚える。

それが私の仕事であり、誇り。

それを大切にして主に尽くす。

それが懐中時計の私。

主の懐中時計。

ふふふ。

きっと主は私がこんなことを想っているとは露にも思わないだろう。それでも、言葉が届かなくても、私はこれからも主に語りかけ続けるだろう。

私はこれからの未来に心を躍らせる。

楽しい未来があることを願い、暖かき未来が来ることを祈る。

私は主の幸福を、主の未来を、壊れゆくまで願い続ける。

私は毎日、主の時を刻む。

ああ、主。

どうか、幸せな時をいつまでも。

どうか、楽しい記憶を永久に。

主のそばで私は見守り、時を紡ごう。

それこそが主のため。

『幸せなときをあなたとともに』

私は祈ろう。

我が主の幸福と未来を。

園田明日美の場合

彼女は小さなことで悩み、苦勞するが、大きなことの前では悩まない。

大胆にかつ単純にこなす。

彼女には友達が多い。

話せる人が多い。

だが、顔が引きつっていたり、声が逃げたそうにしている。

それをもつたいたいと思わないのだろうか。

他人と仲良くなれるというのは一つの才能だ。

それを生かせばどの社会でも生き残れるだろう。

だが、彼女は小心者。

それがもつたいたい。

悩みを己の内に閉じ込める。

吐き出したかと思えば、自分自身が殻から出ていない。

彼女の周りにはたくさん友が居る。

親友と呼べるものもある。

なのになぜ、頼らない。

頼れば悩みなど吹き飛ぶだろうに。

将来、私を手にする者のことを考えていた。

一人の時計屋が作り出した懐中時計。

彼は彼女のことをもつたいたいといつもものようにぼやく。

主の好きな形をとる懐中時計は、主のことを大切に思っている。

彼女はもつと他人を、己を信じるべきだ。

さすれば、おのずと道が開け、一層輝くだろうに。

私が彼女手に渡るのは彼女の十八歳の誕生日。

友人から送られる。

悲しき記憶など、悩み苦しんだ記憶など刻みたくないと思つ。

その願望を新しき主は叶えてくれるだろうか。

友に向ける笑顔を絶やさずにいられるだろうか。

私は心配に思いながら、彼女の手に渡る。

私はおそらく、彼女の手の中で安らぎ安堵するのだろうか。

それが私には愛しいと思えた。

私を贈る彼女の友人たちには感謝したい。

だが、それと同時に恨めしい。

もっと早くに彼女の元に来たかった。

彼女と同じ時を紡ぎたい。

それが一番の願いだ。

彼女の笑顔が一番の安らぎだ。

ああ、早く主に会いたい。

主に会って大切にしてもらおう。

そして、同じ時を生きるんだ。

私の主は謙虚だが、心根は優しい。

そんな主の元に・・・

ああ。彼女の元に来てよかった。

これで、物語を刻むことができる。

これで、私の意義が証明される。

主、私のほうこそ・・・

『ありがとう・・・！』

私は主に優しく微笑んだ。

そして、彼女の元に心優しき懐中時計が届けられた。

誉田亜耶香の場合

弟妹たちはみな良き主に巡り合えただろうか。

本来作られるべき懐中時計は四つ。

その試作品として作られたのがこの私。

弟妹たちと比べ、私は刻むことができる時間が短い。

弟妹たちは壊れることがなければ、永遠に刻むことができる。

だが、私は人ひとり分の時を刻むことができるのかさえ怪しい。

私はいずれ破棄される存在。

せめて、弟妹たちの旅立ちを見届けてからこの命を終わらせたい。

そう思っていたら、私を作った時計屋が叶えてくれた。

弟妹たちが旅立てば消える。

それが、私に課された宿命だった。

・・・はずだった。

だが、彼女が、弟妹たちを買いに来た彼女が私を手を取った。

そして、彼女は私を、消えるはずだった命を救った。

彼女は友人の誕生日の贈り物を買いに来たという。

普通の人間は物に、懐中時計に話しかけたりはしない。

それなのに、彼女は話しかけてくる。

そして、彼女はなぜか懐かしい感じがする。

この感覚は・・・そう、私たちを作った時計屋のもの。

彼女は、時計屋と一体どんな関係なのだろう。

すると、彼女は答える。

私は時計屋の孫、と。

だから、友人たちを連れてきたのだ、と。

ああ。

彼女は全てを知っている。

弟妹たち懐中時計を持つべきものが誰なのかを。
私の宿命も。

だから、彼女は私を買った。
私の宿命を知っているからこそ、私を手を取った。
もしかしたら、時計屋はそれを知っていたのかもしれない。

四人の少女たちを繋ぐために作られた弟妹たち。
その四人の友人でもある彼女。

彼女の時を紡ぐ時計はない。
ああ。

だから、私がいるのか。

四人の少女の時を紡ぐのは弟妹たち。

彼女の時を紡ぐのは、私。

試作品であり、失敗作である私。

時計屋の孫であるならば、何度壊れようと直せるといふことが。
だったら・・・

『あなたと共に、朽ちゆくまで時を刻もう・・・』

たとえ、壊れてもあなたが直してくれるなら、刻み続けることができ。
きる。

あなたの時を刻むことが、私の生きる糧。

エピソード

ああ。

儂の子供たちはきちんとあの娘たちの手に渡っただろうか。

儂の孫の友人たちに。

儂は孫に何もしてやることができなんだ。

その報いにとあの時計を作ったが、孫は喜んでいるだろうか。

孫の絆が途絶えなければそれでよい。

儂と孫の絆はとうに切れてしまっている。

だから、せめて新たに繋がれる孫との絆は守ってやりたい。

儂の代わりに儂の子供たちが、孫の絆の証になってくれる。

孫の絆になることはできんかもしれん。

しかし、孫を見守ってくれるだろう。

あの時計たちはそのために作ったのだから。

あの時計たちに自我を持たせたのは、自分で思考し、絆を保たせるため。

絆は機械的であってはならん。

絆は人間的でなければならぬ。

人間的でない絆は絆とは言わぬ。

それはもうただの導線だ。

そうなつてはいかんのだ。

儂と孫の間には、いや儂と家族の間には導線しかありはしなかった。

儂は時計をつくることに躍起になって、家族を顧みなかった。

だから、孫の存在も知らなかった。

時計を作れないようになってから知った。

その時にはもう孫は十歳だった。

十年もの時間が空いてしまえば、絆を紡ぐことなどできん。

だから、儂は絆を紡ぐつもりでまた時計を作った。

人生で最高の五つの懐中時計を。

一つ一つに儂の魂を込めた。

この時計たちが孫を、その友人たちを見守ってくれるだろう。もう、儂に思い残すことはない。

だが、未練はある。

孫を抱き締めたかった。

孫と話がしたかった。

孫と笑いあいたかった。

だが、それが叶うことはない。

この時計屋には誰もいないのだから。

妻も、息子も、娘も、息子の嫁も、娘の婿も、孫も。

全員がこの家を出て行った。

この時計屋には儂一人。

いや、儂と儂の作った時計たちだけ。

儂は一人、この時計たちに囲まれて逝こう。

孫の事を思いながら。

孫に、家族に謝りながら。

儂が静かにまぶたを下ろそうとした時、誰かが店に入ってきた。

ああ。

孫の友人たち。

そして、愛しい孫。

最後にその姿を見ることができてよかった。

どうか、時計たちが彼女たちの手に渡ることを願う。

どうか、彼女たちが笑い続けることを願う。

どうか、彼女たちが幸福であることを。

ただただ願う。

もうすぐ消える儂にはそれくらいしかできん。

ああ。

時計たちよ。

孫たちの時を刻んでおくれ。

儂の叶うことのなかった時間をお前たちが叶えておくれ。

あの娘たちの絆になっておくれ。

「どうか・・・彼女たちに時の祝福を・・・」

エピローグ（後書き）

これで完結になります。

読んでいただいております。ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8793w/>

5人の懐中時計

2011年11月6日01時13分発行